

2018年JAF全日本カート選手権OK部門第3・4戦 2018年全日本カート選手権FS-125部門東地域第2戦
2018年地方カート選手権FP-3部門/FS-125部門東地域第2戦
2018年ジュニアカート選手権FP-Jr部門/FP-Jr Cadets部門東地域第2戦 [JAF公認No.2018-1805]

開催日：6月2～3日 開催場所：本庄サーキット 格式：国内/準国内 主催：T.KBF [クラブ登録No.公認81102]、SPH [団体登録No.公認81101]

フォト/野澤廣幸 レポート/水谷一夫

OK 部門第3戦はトニーカート勢が1-2フィニッシュ!



チームメイト同士の対決は、最後までガードが堅かった佐々木選手に軍配が上がった。

前 回の開幕戦もてぎ大会で明らかとなったのは、OK部門に参入する3メーカーのタイヤの戦闘力が、昨年以上に接近していることだった。今回のレースウィークで好調ぶりがささやかれていたのはブリヂストン勢。そんな中、7分間のタイム計測で予選のグリッドを決めるタイムトライアルで、ヨコハマタイヤを履く佐藤選手が衝撃のタイムアタックを披露した。

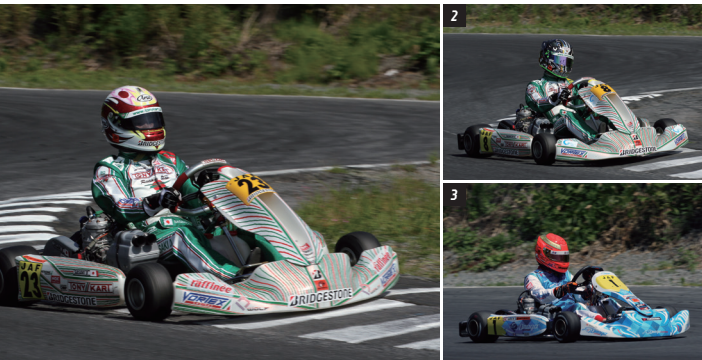
超高速レイアウトの本庄サーキットにコースインしたドライバーたちは、スリップストリー

ムでタイムを削るべく、大きな群れを成してレースさながらのポジションチェンジを繰り返す。これでは理想のアタックは不可能と判断した佐藤選手は、独り集団を離れて大きくスロウダウン。前後にたっぷり間合いを取ると、一気に加速して3周を全力で走り、単独走行で見事トップタイムを叩き出してみせたのだ。

約0.1秒差の2番手は、ブリヂストンの開発ドライバー佐々木大樹選手。そこから0.2秒の間に、半数以上の13台がひしめく。苦

境が伝えられるダンロップ勢も、朝日ターボ選手が奮闘して4番手に着けた。ドライバーもタイヤも、各車の速さはまさに紙一重だ。

そしてレースが始まると、戦いを優位に進めたのはやはりBS勢だった。佐藤選手は予選ヒートこそトップを死守してポールを獲ったが、決勝が始まると徐々に後続に飲み込まれて



OK 部門第3戦/1.有利なレース展開で第3戦の1位を獲得した佐々木選手。2.惜しくも2位となった高橋選手だが見事な好走を見せた。3.チェッカー直前に抜け出した佐藤選手が3位。

OK 部門第4戦/4.2位入賞で首位に立った佐々木選手。5.ルーキーの森山選手は嬉しい初表彰台で3位。6.僅差で競り勝った名取選手が優勝。



地方選手権FS-125部門／出走5台のうち4台が集団となってホットな優勝争いを展開。**7**残り4周で清水啓伸選手が抜け出し、最後は2秒弱のリードを開いて勝利を果たした。**8**、ゴールの瞬間まで続いた2位争いは、黒岩靖広選手のものに。**9**、小林拓実選手が最後の1周で佐久間晴喜選手をかわして、表彰台の最後の1席を手に入れた。

FP-Jr Cadets部門／7台が群れを成して目まぐるしくポジションチェンジを繰り返した優勝争いは最後、先頭の2台が横一線でコントロールラインをまたいだ。**10**、0.009秒差の決着で勝者となったのは岡澤圭吾選手。6番グリッドから決勝をスタートすると、レース中盤から一気に順位を上げて初優勝を獲得した。**11**、五十嵐文太郎選手は鼻の差で2位に終わるも、開幕戦の勝利に続く活躍でポイント争いをリード。**12**、2番グリッドの鈴木恵武選手が、スタート直後のポジションダウンを克服して3位となった。



FP-3部門／予選に引き続き、決勝も川福健太選手と蒲原希選手のマッチレースとなった。**13**、川福選手はレース序盤の2周こそ蒲選手に先頭を明け渡したものの、それ以降は揺るぎなくトップの座を守り切り、デビュー2戦目で初優勝を遂げた。**14**、2位の蒲選手は通算3戦目のFP-3で初めて勝利を逃したが、苦戦気味だったレースを最良の結果につなげてみせた。**15**、トップ争いの後方では、5番グリッドの高田亮選手がスタートでふたつ順位を上げ、単独走行で3位のチェッカーを受けた。

FP-Jr部門／**16**、ウィナーは山越ヒュウ選手。2番グリッドからのスタートで5番手に後退したところから追い上げ、レース中盤にトップに立つと後続を突き離し、FP-Jrカデット部門からのステップアップ2戦目で初優勝を飾った。**17**、単独走行で2位フィニッシュの角陽向選手は、タイムトライアル9番手、予選6番手とセッションごとに順位を上げての自己最上位。**18**、ポールスタートの鈴木斗輝哉選手は、初勝利こそ逃したものの、最後まで続いた3位争いに競り勝って表彰台をつかみ取った。

いく。先頭集団は5台。佐々木選手、高橋悠之選手、名取鉄平選手のBS勢3台と、佐藤選手、三村壮太郎選手のYH勢2台だ。

レースが後半戦に入ると、佐々木選手と高橋選手のトニーカートRTJデュオが1-2番手に立ち、3番手以降との間に若干のギャップが開いた。最後はこのふたりのチームメイト対決だ。先頭の佐々木選手はラスト2周を迎えると、要所となるコーナーでインをきっちりと締めて後続の反撃の芽を摘み、フィニッシュまでそのポジションを守り切った。「後半のペースが良かったのは僕とハル(高橋選手)。大勢が連なった中でも有利にレースを運べた」と、第1戦に続く今季2勝目の佐々木選手。

高橋選手は「ラスト2周で仕掛けようと思っていたけれど、それを読まれていた」と悔しげだが、手応えのあるレースで今季最上位の2位に。チェッカー目前の最終コーナーで名取選手を逆転した佐藤選手が3位に入り、BS勢の表彰台独占を阻止している。

第4戦の決勝は、佐々木選手のリードで始

まった。やがてトップは名取選手に交代。中盤からはこの2台が3番手以降を引き離していく。ふたりの強敵となるはずだった佐藤選手は、予選でエンジントラブルに泣き、最後尾グリッドからの追い上げを強いられていた。

2番手に行く佐々木選手は、名取選手のスリップを使いながら余力を溜め、残り5周で再び先頭へ。佐々木選手の勝ちパターンだ。だが、トップに出てスリップの恩恵を失ったロスは、佐々木選手の想定以上に大きかった。思うようにペースが上がらない佐々木選手から、翌周、名取選手がトップを奪い返す。

迎えた最終ラップ。名取選手は勝負どころの6コーナーの攻防をぎりぎり制したが、最終コーナーでまでも佐々木選手が名取選手に並びかける。フィニッシュは横一線。0.02秒差でウィナーとなったのは、昨年の本庄大会でも第2レースを制した名取選手だった。「佐々木選手とは予選から同じくらいのペースで、どちらが勝つか分らなかった。真後ろに着かれて、絶対に負けないという気持ちで走りました」と、

名取選手は興奮冷めやらぬ表情で語った。

チャンピオン獲得を今季の最大目標に掲げる佐々木選手は、アクシデントのリスクを避けての2位。それでもポイントランキングのトップ浮上は、狙い通りの結果だった。

佐藤選手は急浮上を続けてセカンドグループに追い付いたが、そこでライバルたちの激しい反撃に遭い、5位でレースを終えた。

この大会のもうひとつのトピックスは、ルーキーたちの台頭だった。第4戦では森山冬星選手が10番グリッドから順位を上げ、セカンドグループのホットな攻防に競り勝って3位でフィニッシュ。だが、森山選手は殊勲賞ものの初表彰台にも「マシンの仕上がりはバッチリだったのに勝てるレースを落としてしまった。今年は3回は勝たいたい」と、ひたすら貪欲なコメントだ。また、水野皓稀選手がタイムトライアルで5番手に着け、第3戦では5番手ゴール(フロントフェアリングのペナルティで結果は10位)、第4戦ではセカンドグループの牽引役となって6位入賞と、光る速さをアピールした。



全日本FS-125部門／決勝は、大木一輝選手が積極的に前を抜かしていく走りでもレースの大半をリードした。**19**、終盤に至っても6台が一丸で順位を入れ替える激闘が続いた。**20**、塚田海斗選手はトップと0.055秒差の2位。**21**、同じく僅差で3位のフィニッシュの木内秀征選手は、全日本デビュー2戦目で初の表彰台獲得。**22**「ゴールの瞬間は頭が真っ白になりました。バトルに負けないレースができたことがよかったんだと思います。ずいぶん時間がかかったけれど、勝ててうれしいです」と1位の大木選手のコメント。**23**、最終ラップに塚田選手を逆転して、フル参戦2年目で歓喜の初優勝を飾った大木選手。